中・高家庭科教員に求められる生徒理解と教科のとらえ方に関する研究（その２）

―衣生活を対象にして―

榊原典子・田中任代

（京都教育大学）

Research Studies on how to be caught about Students' Image and how to be touched by Junior High School and High School Home Economics Teaches.

－Clothing Life－

Noriko SAKAKIBARA・Hideyo TANAKA

2014 年 11 月 30 日受理

抄録：その２では衣生活を中心に取り上げ、中・高校生の衣生活実態と家庭教育の状況、中・高家庭科教員の指導状況や衣生活指導の考え方、さらに家庭科教育を推進していくうえでの課題について、京都府下の生徒ならびに家庭科教員を対象とした調査結果をもとに考察した。

生徒調査の結果より、裁縫用具の名称に関する認知度は高いものの縫製方法を表す用語の認知度は高くなかった。また、家庭での衣に関する実践状況については、洗濯に関わるものに多少実践している状況が見られたものの裁縫を伴う作業の実践度は低かった。学校で身につけた製作技能を生かして家でも作ってみることは中１でみられたがその後は伸びていない。ただ、これらの結果の多くに男女差が見られた。生徒ができていると思っている製作技能も、教員からは多くができていないと捉えられ、両者の評価に差が見られた。生徒の知識・技術の定着には家庭での経験が関わっており、さらに親の生活意識も関連していた。中学校教員は製作の時間を増やしたいとしているが、単位数の少ない高校教員は製作の意義は認めつつも減らしたいとしていることも明らかとなった。衣生活においては生徒の製作技能や家庭での実践状況に厳しい実態が見られるので、校種間のカリキュラムや重点の置き方の検討が必要であることが示唆された。家庭科教育推進のための課題は、時間数不足、実践力向上にむけた学習指導、技術指導での TT 導入や少人数教育の実現等があり、生徒の食生活・衣生活実態からも改めてその必要性が認識できた。

キーワード：製作技能、衣生活　中・高家庭科、指導実態、京都府

Ⅰ．はじめに

中等家庭科教育では、家庭生活における身近な生活技術の習得が長らく教科目標に掲げられその特徴を形づくってきたが、昨今の子どもたちの生活経験不足や家庭科の指導時数・単位数の減少により、技能・技術だけでなく知識においても未定着なままで小・中・高等学校での学習の繰り返しが行われている。従来から家庭科では、生徒は講義形式より実習・実技形式の授業を好んでいたが、最近では被服製作を苦手とするだけでなく、圧倒的な支持を得てきた調理実習でさえ面倒に感じる生徒が見られるようになってきた。このような中で、実技指導はますます困難を極めてきており、実習を中心としてきた家庭科での学習指導のあり方は再検討の時期に来ている。

本研究では、京都市・京都府下の中学校および高等学校の生徒および家庭科教員を対象に行った調査結果をもとに、特に「食」および「衣」の技能・技術の習得（定着）状況と生徒の生活実態について明らかにし、生徒の生活経験や生活環境との関わりについて分析を行った。一方、中・高家庭科教員がどのように生徒の実態を捉えどのような課題を抱えて指導にあたっているのか、中・高等学校では果たして連続性をもった指導ができているのか、校種間の共通点や相違点を明らかにし、限られた指導時数の中で実をあげることが求められているこれか

らの家庭科の学習指導に少しでも示唆が得られればと願う。

前報のその１では、調査の概要および食生活の内容について、生徒の認識程度および実践状況を学年差や男女差も明らかにしながら述べてきた。また、中・高校教員の食生活に関する指導の実態および課題のとらえ方について明らかにした。続く本報その２では、衣生活における中・高校生の知識・技術の自己認識および中・高校教員による衣生活に関する生徒理解および家庭科認識について明らかにし、本研究のまとめを行う。

Ⅱ．研究方法

その１に同じ。京都府下の中・高校生徒対象調査と中・高校教員対象の調査を行った。

1．中・高校生徒調査

（1）調査対象

中学校は京都市内 4 校および京都府下 4 校の計 8 中学校、高等学校は京都府立 9 校の生徒 1,109 名（中学校 755 名、高等学校 354 名：男子 589 名、女子 520 名）であった。なお、高等学校は「家庭基礎」履修者である。

（2）調査内容

その１の食生活の内容に準じ、その２では衣生活における内容を取り上げる。衣生活の製作に関わる用語 10 項目の認知度および 11 項目の技術習得度、家庭での衣生活経験（衣生活の実践度）11 項目、学校家庭科の製作を受けた家庭での実践度、製作の好き嫌い、家庭での製作状況、さらに、家の人の製作状況、衣生活における家庭教育などである。

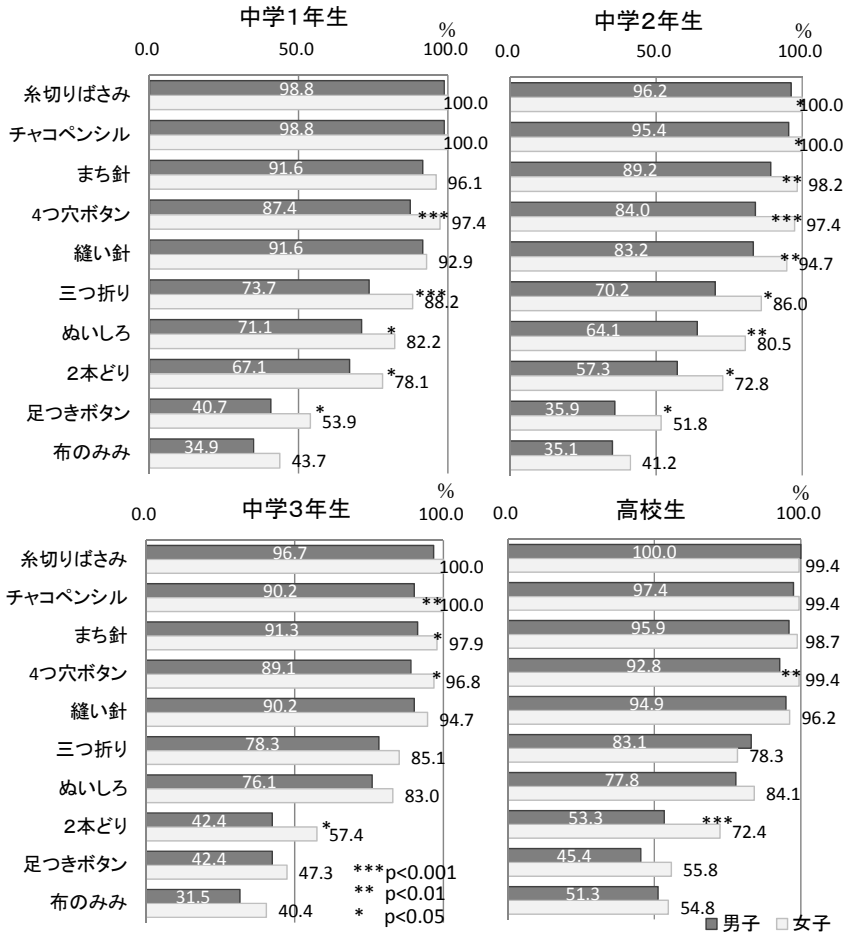

図1-1　衣生活に関する用語の認知度（学年別・男女別）

2．中・高校教員調査

（1）調査対象

その１に同じ。京都府下の全中学校・高等学校各校の家庭科教員を対象に調査票を配布し、それぞれ 42 名および 49 名の回答があった（回収率 29.3%）。

（2）調査内容

対象者の属性（所属、勤務形態、経験年数等）、家庭科指導内容全般に加え、その１の食生活に関する内容に準じ、生徒の衣生活に関する理解度、衣生活指導の実態および考え方、家庭科教育の課題等について、できるだけ中・高家庭科教員の比較ができるような内容構成とした。

Ⅲ．結果および考察

生徒調査の結果・考察を踏まえて、教員調査結果の考察を行い、衣生活に関する中・高家庭科教員による生徒

理解の相違や共通性を明らかにし、これからの中等家庭科指導のあり方を検討する。

1. 中・高校生徒の衣に関する家庭生活実態と技能習得状況

中・高校生対象の調査結果をもとに、衣生活に関する用語の認知度と家庭での実践状況ならびに家庭教育の実態を明らかにする。

(1) 衣生活に関する用語の認知度

図 1-1 は、衣生活の製作の際に使用する用具および縫製方法に関する用語 10 項目について、その認知度（知っている）を中・高校生の学年別・男女別に表したものである。分散分析の検定の結果、すべての項目に男女差が見られた。(「手で洗濯をする」の p<0. 01 以外は、P<0. 001) 用具に着目すると「足つきボタン」を除いて全般に認知度が高い。しかし「布のみみ」「２本どり」「ぬいしろ」「三つ折り」など小・中学校の製作の際に出てくる裁縫の方法については必ずしもその認知度は高くない。先行研究にある日影弥生ら（2011）[1]の中学 1 年生の結果と比較すると、用具については 4 つ穴ボタンの男子（日置らの調査 96. 9%）、三つ折りの男女（同 90. 9%, 88. 7%）、ぬいしろの男子（同 83. 3%）布のみみの男女（54. 1%, 67. 7%）の回答結果でいずれも今回の調査結果の方が低かった。「２本どり」と「布のみみ」の結果については、今回学年間の認知度に有意差が見られた（p<0. 001）。中学校では、現行の学習指導要領（2012 年度実施）より製作内容の必修が復活したが、調査時期が移行期間にあたったためか、中学校で認知度の低下が見られた。

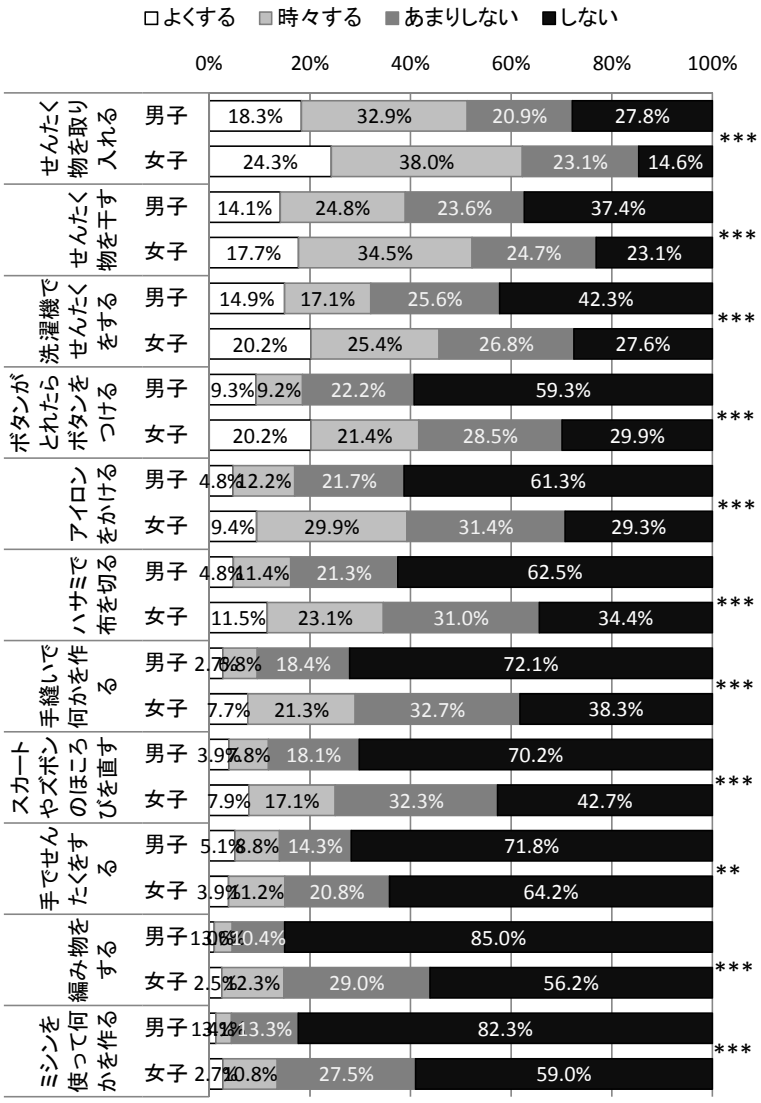

図2-1 家庭での衣生活実践度（男女別）　*** p<0.001　** p<0.01

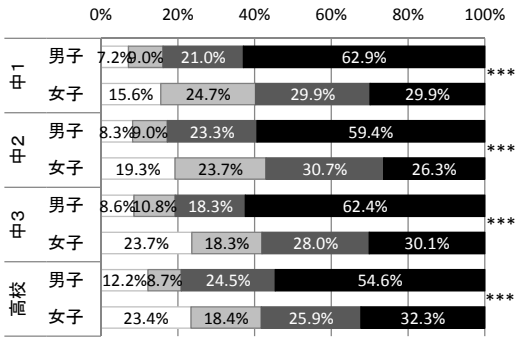

図2-2 ボタンがとれたらボタンをつける（学年・男女別）

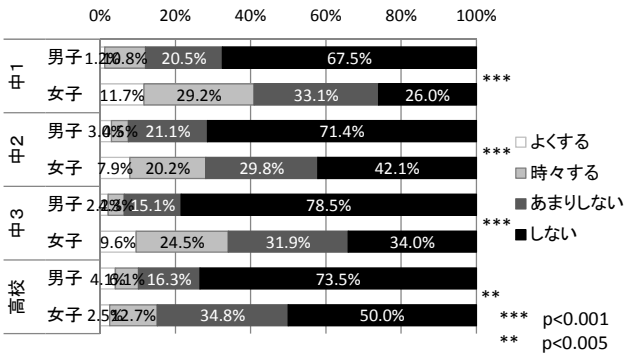

図2-3 手縫いで何かを作る（学年・男女別）

（2）家庭での衣生活実践度（衣生活経験）

家庭で衣生活に関する 11 の作業（「洗濯物を取り入れる」「洗濯物を干す」「洗濯機で洗濯をする」「ボタンつけ」「アイロンをかける」「ハサミで布を切る」「手縫いで何かを作る」「ほころび直し」「手で洗濯をする」「編み物をする」「ミシンを使って作る」）について、どの程度行っているか生徒全員に聞いた結果が図 2-1 である。いずれの項目も男女で高い有意差が見られた。男女ともに『よくする』『時々する』を合わせて 50%を超えるのは、「洗濯物を取り入れる」だけであった。洗濯については、他に比べ比較的行っているものの、家庭科の学習で行われている「手縫いで何かを作る」や「ボタンつけ」・「ほころび直し」は、『しない』と答えたものが、女子 38.3%, 男子 72.1%、同 29.9%, 59.3%、同 42.7% , 70.2%と多く、衣生活についての実践度は食生活のそれに比べて低率であることが分かった。

図 2-2 および図 2-3 は、「ボタンつけ」と「手縫いで何かを作る」の設問について、中・高校生の学年別・男女別に結果を示したものである。「ボタンつけ」は男女で実践率に差が大きいが、小学校家庭科の教材であるためか、すでに中学校 1 年生でやっている子といない子の固定化がみられ、その後の学年による上昇は見られない。「手縫いで何かを作る」は、中学校 1 年生で実践率が高い。小学校で裁縫による物づくりを学んで興味を持ち家庭でもやるようになったが、学年が上がるにつれ興味が薄れやらなくなる様子が見て取れる。田中志穂ら[2] (2010) の定着度の調査結果でも衣生活に関わる項目は特に家庭でやらなくなる男子にとって低下することが多く男女の定着度の差が大きくなることが明らかにされている。

（3）衣生活の学習を活かした家庭での実践（衣の実践意欲）

図 3-1 の「学校で学習した布を使った製作を家庭でもやってみようとしていますか」という設問にも同様の結果が見られる。この問いにおいても男女差がみられるが、『そうしている』『どちらかといえばそうしている』と回答したものに着目すると、中 1 女子 32.4%, 男子 13.9%が中 2 以降に比べてその実践率が高くなっている。小学校での製作学習は子どもの興味関心や心身の成長と生活・学習環境に適合し重要であるということができるとともに、中学校以降でも家庭での応用を促す学習内容の工夫が必要である。

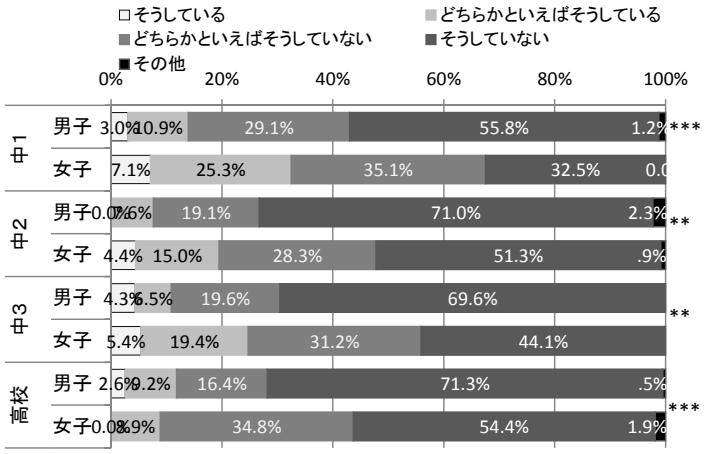

図3-1　学校で学習した布を使った製作を、家でもやってみようとしていますか　*** p<0.001　** p<0.005

（4）衣製作の好き嫌いと実践状況

そこで、中・高校生に縫い針やミシンを使って物を作ることは好きかどうかをたずねた結果が図 4-1 である。男女の有意差は高いが、『好き』『どちらかといえば好き』と答えたものは、特に女子で図 3-1 の結果を上回り多くなっている。しかし、全国の中学 3 年生から抽出された対象者に実施された特定の課題に関する調査（技術・家庭）[3]においては、「ミシンを使ってものを作ることが好きですか」の問いに対し『好きだ』（男子 20.4%, 女子 35.6%）『どちらかといえば好きだ（同 27.6%, 30.0%）』『どちらかといえば好きではない（同 25.2%, 20.4%）』『好きではない（同

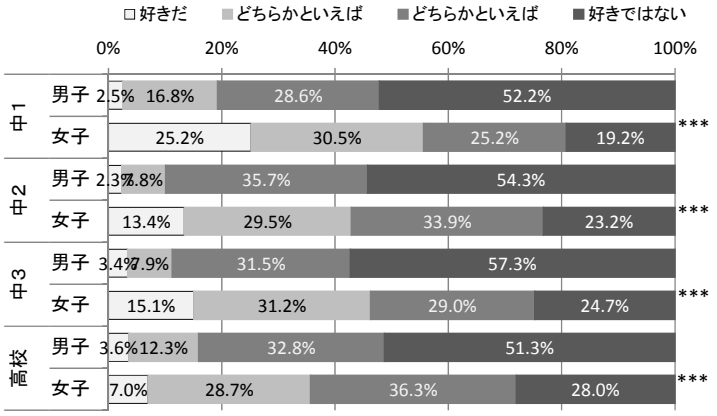

図4-1　縫い針やミシンを使って物を作ることが好きですか　*** p<0.001　** p<0.005

26.5%,13.9%)』という結果が得られており、今回は低い結果となっており、特に男子で顕著である。同調査がペーパーテストとして行われた全国調査であることを考えると単純に比較することはできないが、男子の裁縫離れは深刻になっていると言えなくはない。

『好き』『どちらかといえば好き』と答え人に、何を作っているのか選択肢を挙げて尋ねたところ表 4-1 のような回答結果を得た。女子ではミサンガ、マスコット、袋物などの自分の好みの物を、男子では雑巾、袋物、クッションなど実用的な物をそれぞれ作る傾向が見られた。

一方、『どちらかといえば好きではない』『好きではない』と答えた人へは、好きでない理由と今後の希望について尋ねた。その結果が図 4-2、図 4-3 である。好きでない理由は、『興味がない』が最も多く、続いて『作るのが面倒』『下手だから』『作り方がわからない』であった。今後どのようにしたいですかとの問いには、『作りたいとは思わない』が第一位ではあるものの、『作れるようになりたい』や『作ってみたい』という希望が女子で半数近くあげられた。男子も『作れるようになりたい』とするものが一定数いることから、子どもたちの技能に合わせた丁寧な実技指導を取り入れることで興味をもたせ苦手意識を克服し生活に生かせるようになっていくのではないかと期待される。

「おうちの人はミシンを使って何か作りますか」と、家庭での保護者の裁縫状況を尋ねた。この結果をみると、『よく作る』『ときどき作る』を合わせても 4 割程度の家庭でしか行われていない。『わからない』と回答したものも多く、家の人が行っているのを目にすることがなくわからないのと自分が関心ないために目にしたかどうかわからないの双方が含まれていると考えられる。これらの結果から、子どもたちの身の回りから手作りする機会を目にすることが減ってきていると推測される。

生活の中で手先を使って物を作る機会が少なくなり、子どもたちの手指の巧緻性はますます

表 4-1 物づくりの製作品　　人（%）

		ミサンガ	袋物	雑巾	マスコット	編み物	クッション	シュシュ	ぬいぐるみ	ティッシュケース	その他
中1	男子	9(5.4)	6(3.6)	16(9.6)	0(0.0)	5(3.0)	5(3.0)	0(0.0)	1(0.6)	5(3.0)	3(1.8)
	女子	36(23.4)	37(24.0)	28(18.2)	37(24.0)	31(20.1)	24(15.6)	24(15.6)	12(7.8)	17(11.0)	8(5.2)
中2	男子	1(0.8)	5(3.8)	7(5.3)	3(2.3)	1(0.8)	3(2.3)	1(0.8)	1(0.8)	2(1.5)	0(0.0)
	女子	22(19.3)	19(16.7)	14(12.3)	18(15.8)	14(12.3)	12(10.5)	9(7.9)	11(9.6)	9(7.9)	5(4.4)
中3	男子	4(4.3)	4(4.3)	3(3.2)	2(2.2)	2(2.2)	3(3.2)	0(0.0)	2(2.2)	1(1.1)	0(0.0)
	女子	23(24.5)	14(14.9)	14(13.8)	18(19.1)	6(6.4)	8(8.5)	9(9.6)	12(12.8)	3(3.2)	3(3.2)
高校	男子	1(1.1)	5(5.3)	1(1.1)	4(4.2)	1(1.1)	3(3.2)	2(2.1)	3(3.2)	2(2.1)	5(5.3)
	女子	17(14.8)	11(9.6)	14(12.2)	11(9.6)	12(10.4)	5(4.3)	8(7.0)	1(0.9)	3(2.6)	4(3.5)

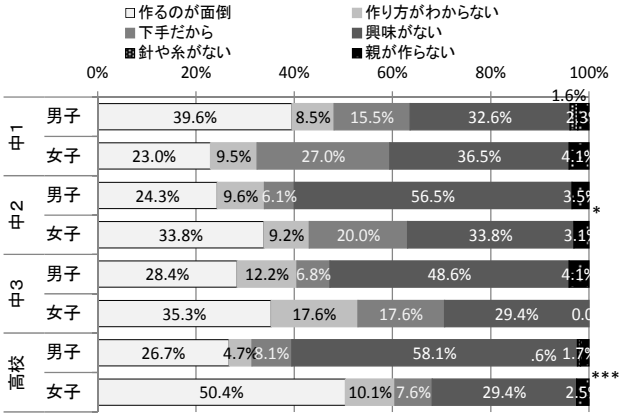

図4-2 物づくりが好きでないのはなぜですか　*** p<0.001　* p<0.05

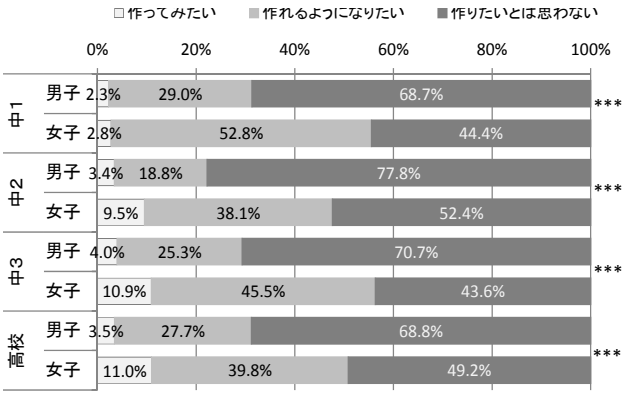

図4-3 今後どのようにしたいですか　*** p<0.001

低下している。家庭科教育における生活技術の習得や実践力の育成は、衣食住の生活そのものの向上をもたらすだけでなく、ジェンダー観や自立意識など人間観や社会観の醸成上重要な意味を持つ[4]と指摘されている点からも『下手だから』『作るのが面倒だから』『作り方がわからないから』といった理由で物づくりから遠のくのではなく、小・中・高等学校と一貫して取り組んでいる家庭科における製作学習の意義を見直し、物づくりを通した豊かな心と生活の潤いについて学習の場を保障していく必要があるといえる。

（5）生徒の衣生活の知識や技能の定着には何が影響しているか（パス解析モデル）

中・高校生の衣生活に関わる用語の認知度や技能の程度および家庭生活での実践状況などを見てきた。残念ながら、学校教育で家庭科を学んでいる割に、知識も技能も定着しているとはいいがたく、中学校・高等学校と進むにつれ興味や関心は薄れ実践状況も低下傾向が見られた。そこで、衣生活の知識や技能の定着には何が影響しているかを、今回の生徒調査で得られた結果を用いて関連性の構築を試みた。調査項目にあった基本的属性をはじめ、衣生活の製作に関わる用語 10 項目の認識度や 11 項目の技術習得度、家庭での衣生活経験（衣生活の実践度）11 項目、製作学習を受け家庭で物づくりをやってみようと思うかにあらわれる実践意欲、製作の好き嫌い、さらに家の人の製作状況や手伝いなどの家庭教育、生活時間など生活習慣にかかわる項目などの結果を用いてパス解析を行った。「家族構成」「生活習慣」を外生的潜在変数とし、「衣生活に関する知識や技術の定着度」「家庭での衣生活経験」「親の生活意識」を内生的潜在変数としてパス解析モデルを構築した（図 5-1）。パス図に示した標準化係数は、すべて 1%水準以下で有意性が認められた。モデルの適合度 GFI は 0.898 で、ある程度の適合度が得られた。生徒に見られる家庭での衣生活経験や意欲・実践度は、親の生活意識や家庭教育、また規則正しい生活習慣から影響を受け、衣に関する知識・技術の定着をもたらしているという関係性が伺えた。家庭科での衣生活学習の定着は、生徒の家庭教育と相まってもたらされることが導き出されたといえる。

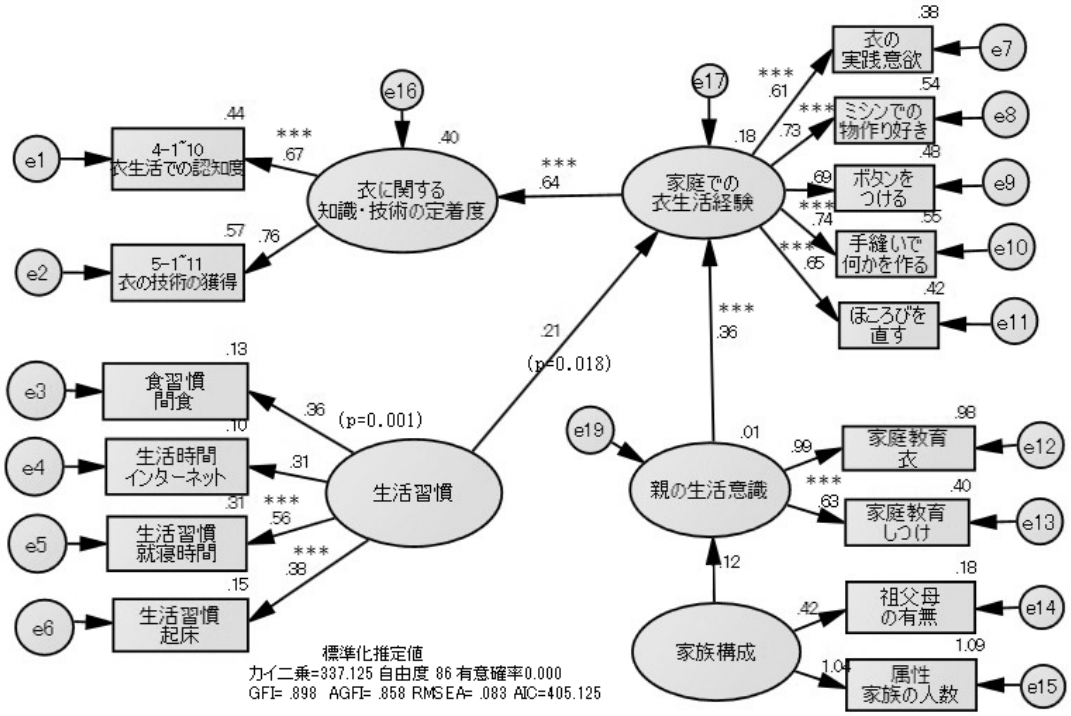

図5-1 生徒の衣に関する知識・技術の定着にかかわる構成概念のパス図　　***<p=0.001

2. 中・高校教員の衣生活に関する生徒理解と指導の実態

ここでは、中・高家庭科教員対象の調査結果をもとに、衣生活に関する生徒理解の状況と衣生活指導の実態および衣生活指導に対する考え方を明らかにし、中・高家庭科教員の相違と家庭科教育における衣生活指導の連続性の課題について検討する。

（1）製作に関わる基礎技術の習得状況理解と指導状況

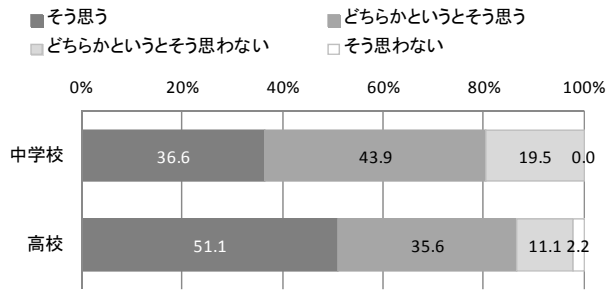

図6-1　玉どめができない生徒が多い（教員）

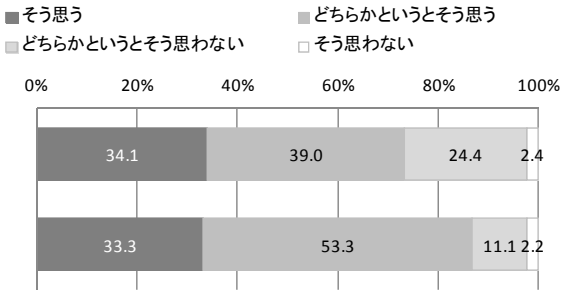

図6-3　ボタンつけができない生徒が多い（教員）

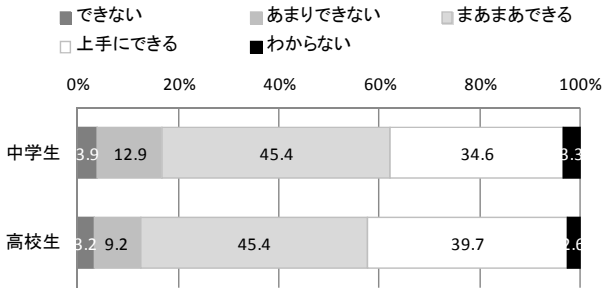

図6-2　玉どめができるか（生徒）

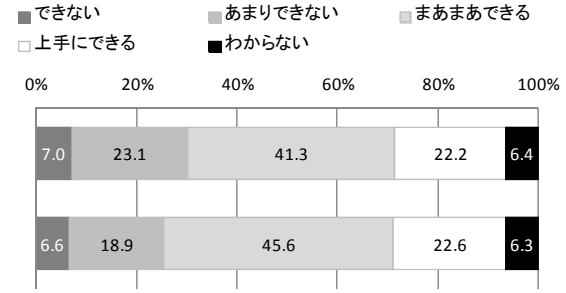

図6-4　ボタンつけができるか（生徒）

中・高校教員と中・高校生双方に、玉結び、玉どめ、並縫い、ボタンつけ、まつり縫い、ミシンの直線縫いそれぞれの基本的な縫い方がどの程度できるか聞いた。その一部を、図 6-1～図 6-4 に示す。教員には、それぞれの裁縫技術が「できない生徒が多いか」について『そう思う』～『そう思わない』の 4 段階で、生徒には、「上手にできるか」と問い『できない』～『上手にできる』4 段階と『わからない』を加えて 5 択で聞いた結果である。これを見ると、教員と生徒の評価に明らかな差異が見られる。小学校でまず裁縫技術の基礎として習う「玉どめ」について、『できない』『あまりできない』とする中学生は 16.3%, 高校生は 11.8%に対し、教員はできない生徒が多い『そう思う』『どちらかというとそう思う』合わせ中学校 80.5%, 高校 86.7%と相当数ができないと感じている。玉結び、並縫い、ボタンつけについても同様で、まつり縫いに至っては中学生 32.9%, 高校生 26.1%に対し、教員は中学校 92.7%, 高校 93.3%ができない生徒が多いと思っている。もっとも、まつり縫いについては、生徒に『わからない』とするものも 20%前後いることから、まつり縫いとはどのようなものか理解ができていないと推測される。このように、生徒はできていると思っていても、教員の方はできない子が多いと捉えて

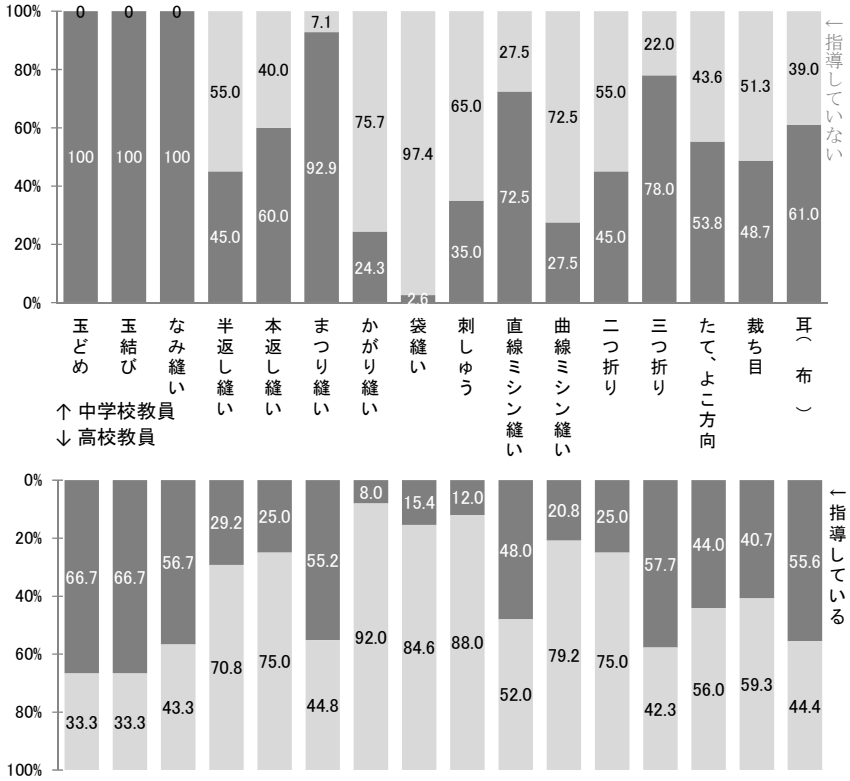

図6-5　中・高での衣生活技術の指導の実態

おり、そのギャップは高等学校の方がより大きい傾向がある。

それでは、実際、教員はこれらの衣生活にかかわる基礎技術や知識をどの程度授業の中で取り上げているのだろうか。中・高等学校での衣生活技術の指導の実施状況をまとめたのが図 6-5 である。中学校では、手縫いの基礎である「玉結び」「玉どめ」「並縫い」は全ての教員が教え、続いて多いのが「まつり縫い」92.9%、「三つ折り」78.0%、「ミシンの直線縫い」72.5%である。中学校の衣生活実習では補修が取り上げられているので、裾上げや布端始末にあたるこれらの実施率が高いといえる。一方、高等学校での実施内容にはばらつきが見られる。高等学校での被服製作実施率は 63.3%であったことから、実施している教員は、中学校同様「玉結び」「玉どめ」「三つ折り」「並縫い」「まつり縫い」「ミシンの直線縫い」の指導率が高いといえる。「かがり縫い」「本返し縫い」「半返し縫い」など手縫いの基礎にあたる縫い方の指導率は高くない。これらは、小学校で指導される内容といってよいであろう。

生徒の裁縫技術の定着状況について教員の理解は図 6-6 のとおりである。小学校の裁縫技術の未定着について中・高校教員共に尋ねたが、『そう思う』『どちらかといえばそう思う』とする教員は、中学校で 65.8%、高等学校で 82.2%と共に高く、高校教員の方がより未定着を指摘する割合が高い傾向にある。高校教員には、さらに中学校での裁縫技術について尋ねたところ 88.9%の教員が未定着と指摘しており高い割合であった。現在の家庭での裁縫離れに加え、前次の改訂で中学校では被服製作をやらなくなったり、補修程度の技術しか扱わなくなってしまったりしたためか、高等学校での学習に困難が積み残されていた。

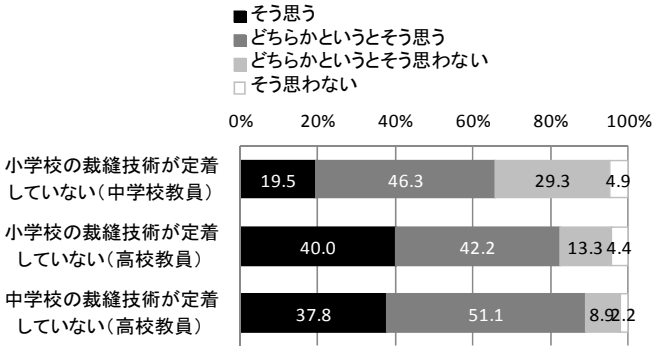

図6-6　小学校・中学校での裁縫技術が定着していないと思う

また、裁縫技術における男女差について尋ねたところ、『男女に差があるとは思わない』（中学校 24.4%, 高等学校 28.9%）『どちらかといえば思わない』（中学校 46.9%, 高等学校 51.1%）と、男女差を肯定しない教員が多くを占めることも明らかとなった。図 2-2 や図 2-3、図 3-1 などでは生徒による日常の実践状況に男女差がみられたものの、教員には男女ともに技能の未定着が強く印象付けられていることは、衣生活実践がある程度みられる女子においても裁縫技術は未熟であるとの教員の理解があるといえる。

（2）衣生活指導の実態

ここでは、衣生活に関する全般的な指導実態について述べておく。

中学校教員の回答から、衣生活の指導時間は平均 17.4 時間で家庭分野の 21.5%を占めていることがわかった。そのうち、「布を用いた物の製作」には平均で 8.0 時間かけている。指導に適切な製作品は「袋物」「ファイルカバー」を挙げる教員が多い。一方、家庭基礎を教えている高校教員は、衣生活の指導時間は平均 8.5 時間で家庭基礎の 15.0%を占めている。そのうち、製作にかける時間には回答者により差が見られ、4〜9 時間が多かった。衣生活に充てている指導時間の多くを製作に費やしていることが分かった。適切な製作品には「袋物」「エプロン」を挙げて、中学校と同種の製作品が挙げられていた。なお、高校教員に、小学校および中学校の製作内容について知っているか聞いたところ、知っていると答えたのは小 48.9%, 中 61.7%であった。

（3）衣生活指導に対する考え方

中・高教員の衣生活に関する各指導事項について、重要度の意向を聞いたところ、図 7-1 のような結果を得た。中学校教員は、「衣服の材料と日常の手入れ」を重要視する人が最も多かった。続いて多かったのが布を用いた物の製作である（47.6%）。他の同種の設問（衣生活指導についての考え方）においても、日常の手入れを中心に取り上げたいとする意見と製作を中心に取り上げたいとする意見に二分されていた。一方、高校教員は今より製作時間を少なくし、他の基礎学習に当てたいとする意見が多かった。図 7-2 の高校教員の結果を見ても、「品質表示、取扱い絵表示等」を重視したい人が最も多く、被服の製作は下位であった。高等学校の家庭基礎は 2 単位であるものの取り扱う範囲は広く、総花的になりがちである。製作実習を取り入れるとたとえ小品の教材でも仕上げに時間がとられ他の衣生活学習や他の分野学習まで圧迫しかねない。製作時間が少ない中では限られた作品

にならざるをえず、小・中・高等学校の教材の重なりにつながってしまう。製作の教育的意義は認めながらも少ない単位数の中で苦慮している様子がうかがえる。

図 7-2 は、中・高校教員に選択式で尋ねた製作学習のねらいに関する意見である。選択肢が両者で異なるため単純な比較はできないが、技能・技術の定着を第一義に置くのではなく、製作を経験させることで手づくりの楽しさを味わわせるのがねらいというのは、両者ともに第１位にあげられた理由である。続いて、学習した小・中学校での技能・技術の定着を目指すことが挙げられている。高校教員は、実習を通して創造性や科学性を教えることが第２位として挙げている。中学校では、製作を通して布の性質や用途に適した縫い方を理解させることと達成感を味わせることが同数であった。

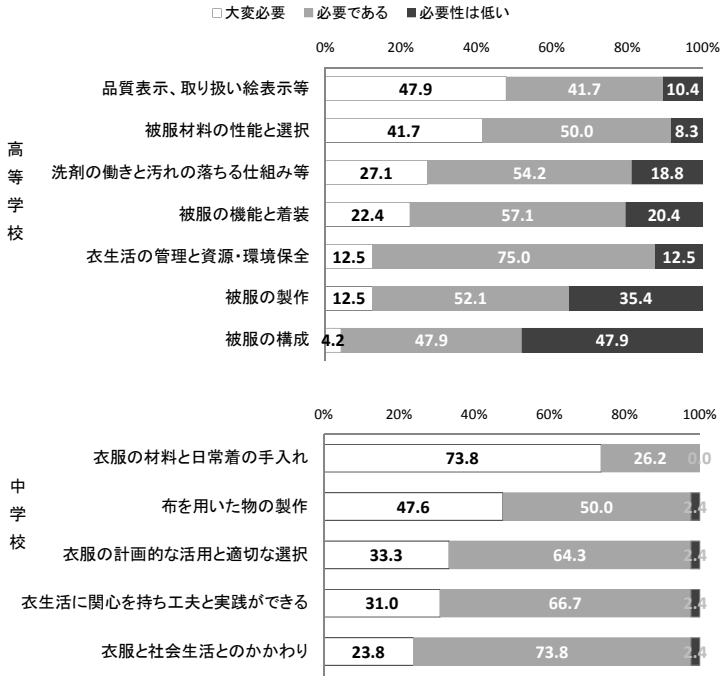

図7-1　衣生活における指導事項の重要度

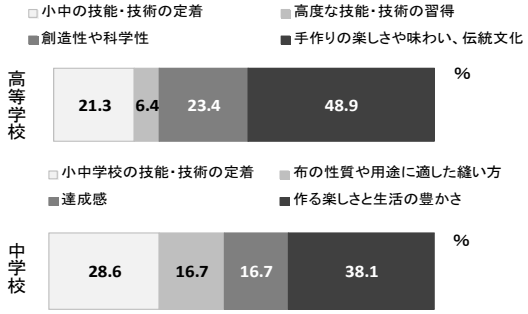

図7-2　製作実習のねらい

3. 家庭科教育の推進に向けての課題

図 8-1 は、中・高家庭科教員に家庭科教育の推進に向けての課題を聞いた結果である。時間数不足、実践力向上にむけた学習指導のあり方、技術指導での TT 導入や少人数教育の実現等が指摘され、今回の生徒をめぐる食生活・衣生活の実態からも、改めてこれらの課題に向けての改善が、今後の中等家庭科教育における実技指導において欠かせない逼近の課題であることが認識できた。

小学校高学年から高等学校までの普通教育として位置づけられている家庭科が、生活者教育として実質的に機能していくためには現行のカリキュラムを小中高一貫した観点からみつめ直し、それぞれの校種の教員が相互に理解し合うとともに、自らの使命を自覚してあたっていくことが必要といえるであろう。

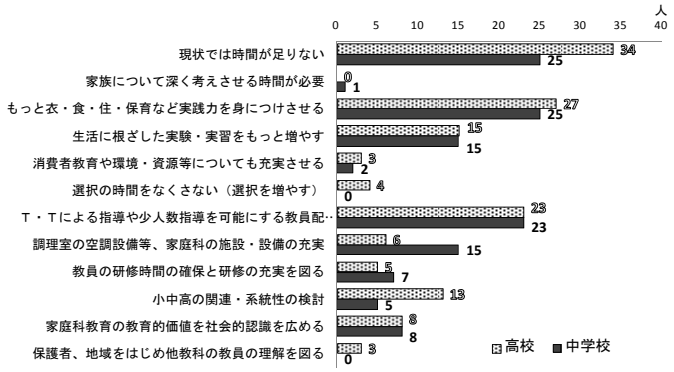

図8-1　家庭科教育推進に向けての課題

Ⅳ．まとめと今後の課題

子どもや家庭を取り巻く環境の変化は著しく、家庭科教員の努力にも拘わらず、子どもたちの基礎的・基本的な生活技能は低下している状況がますます顕著になってきている。本研究は京都市・京都府下の中学校および高等学校の生徒及び家庭科教員を対象にアンケート調査を行い、子どもたちの現状を把握するとともに、この課題に対して家庭科として何が必要なのか何をするべきなのかを明らかにしたいと考えた。

調査は、京都市・府内の中・高校各 4 校で行い、生徒票 1,109 名、また教員票は京都府下 272 校の家庭科教員を対象に郵送留置法で行い、中学校 42 部、高校 49 部の有効回答を得た。

生徒の「食」および「衣」に関する用語の認知度は、特に男子で中学 2 年、3 年で一時的低下が見られた。家

庭科で学習しているにもかかわらず、生活技能の未定着な状況が特に「衣」で明確であった。「ボタンつけ」は男女で実践率に差が大きいが、小学校家庭科の教材であるためか、すでに中学校 1 年生でやっている子といない子の固定化がみられ、その後はほとんど上昇していない。また、学校で学んだあと家庭での調理や裁縫などの実践意欲について尋ねたところ、男女差が強く見られ、特に中 2 の男子で著しく低下していた。また調理の好き嫌いと実践状況については、料理を作ることが好きな人は包丁の使用頻度も高いという相関関係があることがわかった。また、縫い針やミシンを使って物を作ることが好きかどうかをたずねたところ、全国調査に比べ、男子で顕著に低く、男子の裁縫離れが深刻である。しかし、裁縫が好きでない男子も『作れるようになりたい』とするものが一定の割合いることから、子どもたちの技能に合わせた丁寧な実技指導を取り入れることで興味をもたせ苦手意識を克服させることができるのではないかと思われる。今後は教科指導の中で包丁や針を持つ機会を増やし、自信が持てるような指導法の工夫をする必要があると言える。

生徒の技能に関する自己評価は低くなく『まあできる・上手にできる』と捉えているが、教員は『できない・どちらかというとできない子が多い』という評価が大勢を占め、中・高校教員とも生徒理解にずれが生じていた。基礎技術の定着には反復練習が必要であり、教員間で児童・生徒に対する共通理解をもち、小・中・高等学校の接続部分で指導に継続性が担保される仕組み作りが必要と考える。校種間連携に関する自由記述欄に「小学校に最低玉結び、玉どめは出来るようにお願いしている」や「ミシン縫いをやったりやらなかったりする学校があると受け入れ側は大変」「授業数が小中高と減っていくので連携は大事」などという意見が複数見られた。

「食」及び「衣」の技能・技術の習得（定着）状況と生徒の生活実態を明らかにし、生徒の生活経験や、親の生活意識、生活習慣との関わりについて分析、技能の定着に及ぼす要因について推察した。生徒の家庭での生活経験は、実践意欲や家庭の仕事の実践度で構造化され、さらに親の意識や家庭教育、就寝時間や生活時間などの生活習慣からも影響を受け、「食」「衣」に関する知識・技術の定着をもたらしているという関係性がうかがえた。したがって、家庭との連携も視野に入れて、学校での学びを補完する場として機能させる必要があるといえる。

生徒の技能については、教員の認識と生徒の自己評価との間に顕著な差が見られた。技能の未定着については、中学校教員より高校教員の方が強かった。中学校教員は実習時間を増やしたいと思っているが、高校教員は教育的意義は認めながらも時間は増やしたくないと考えている。実習のねらいは、中・高等学校ともに経験させることで手づくりの楽しさを味わわせるところにおいている。自由記述でも「生活体験の少ない子どもたちに物を作る喜びをたくさん味あわせて“できた”“うれしい”“また作ってみよう”という気持ちを持たせるために実習は大切」という意見が多くみられた。

家庭科教育にとっての課題は、時間数不足、実践力向上にむけた学習指導のあり方の模索、技術指導での TT 導入や少人数教育の実現等と今回の調査で指摘されたが、小中高の各校種でそれぞれ何をどこまで着実に身につけさせるかのカリキュラムづくりの議論が必要であり、一貫性の観点から教材開発を具体に検討する必要がある。

最後になりました、本調査にご協力いただきました京都府・京都市の中学校・高等学校の生徒の皆様ならびに家庭科担当の先生方には深く感謝申し上げます。

文　献

1 日影弥生、鳴海多恵子、被服製作に関する知識や技能の定着における高校家庭科男女必修の影響－男女必修以前と必修後約 20 年経過時点での調査結果の比較を通して－日本家庭科教育学会誌、54(1)：12～22(2011)
2 田中志穂、内田惠美子、家庭科学習の定着度、奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要（19），53-59，2010
3 国立教育政策研究所、特定の課題に関する調査（技術・家庭）調査結果（中学校）、国立教育政策研究所教育課程研究センター，134，2007
4 鶴田敦子、荒井紀子、男女共学家庭科の履修と高校生の意識（第 1 報）：ジェンダー観をめぐって、日本家庭科教育学会誌、Vol.39 No.2、39～46（1996）